

省力化を目指した新たな食害防止対策の検討

鏡町アサリ活動組織

鏡町について

鏡町は、熊本県八代市西部の北端にあり、八代海湾奥部に面す。

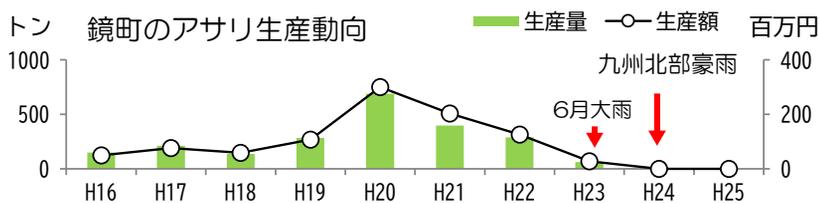
町は、近世以降の干拓によって作られた平野部にあり、農業が盛んである。また、町の地先には、氷川や鏡川、大鞘川によって形成された広大な干潟があり、採貝漁をはじめとする漁業が営まれている。



干潟の現況

町の地先の干潟では、アサリを中心とした採貝漁業が盛んに営まれてきた。アサリ漁業の生産額は、ここ20年のピーク時（平成20年度）で約3億円（水揚量約700トン）となっており、干潟は地区の漁業にとって極めて重要な生産基盤となっていた。また、地域住民が潮干狩りを楽しむ場所にもなっており、干潟は町全体に恵みをもたらす貴重な場になっていた。

しかし、平成23年6月の大雨、また24年7月の九州北部豪雨により、八代海湾奥のアサリ資源が壊滅的な被害を受け、24年度以降、アサリの水揚はなくなり、干潟を軸とした地区の漁家経営は悪化した。また、地域住民で賑わった潮干狩りも中止となり、アサリ資源の回復とこれら生物生産力による干潟機能の再生が喫緊の課題となった。



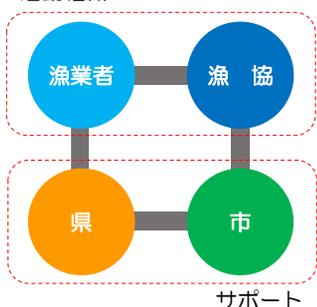
組織の設立および活動方針

上記した課題から、鏡町の漁業者が中心となり、平成25年度に「鏡町アサリ活動組織」を設立し、干潟におけるアサリ資源の回復を図る取組をスタートした。

活動当初は、母貝移植やケアシェルによる稚貝の沈着促進を進めた。しかし、ナルトビエイやクロダイ等による食害の影響で大きな成果が得られなかった。そこで、被覆網による食害防止試験を行い一定の成果を得たことから、4haに及ぶ被覆網対策を本格実施し、大きな成果を得た。

ただし、被覆網の効果は高いものの、その維持管理は極めて労力を要すことから、省力化を目指した囲い網による対策を検討することにした。

活動組織



活動方針

- 被覆網の設置および維持管理の徹底を継続し、アサリ資源の維持を図る。
- 囲い網による食害防止対策を新たに検討し、技術の確立を図る。
- 県の普及員等と連携してモニタリングを行い、試験を評価し、次年度に活かす。

省力化を目指した新たな食害防止対策の検討

(1) 囲い網の設置

被覆網による食害防止対策の省力化を目的に、囲い網の設置を行った。

囲い網は、着底稚貝の多い地区を選び、その区画を海底から水面まで立ち上がる高さ3mの網で囲い、魚の侵入を防ぐやり方とした。

囲い網の大きさは、当初は試験規模の長辺約100m×短辺約50m、総延長360m程度。また、この対策による効果が一定量みられたことから、令和4年度晩秋に、着底稚貝の多い地区の全体に囲い網（総延長約1500m）を設置し、本格運用を目指し、検討を深めることにした。

設置の方法は、6mの杭（コンポー）を10m間隔で立て、そこに高さ3mの網を取り付ける。また、杭が倒れないように、両側をロープで補強する。用いた網の目合は、6cm角の漁網である。

なお、囲い網の底は、めくれないように土嚢を置くようにしている。

(2) 囲い網の維持・管理

囲い網には、流木や枝・葉などの漂流物が大量に引っ掛かる。そのため、網の点検、また適宜、流木等の回収や網の補修・交換を行うようにしている。



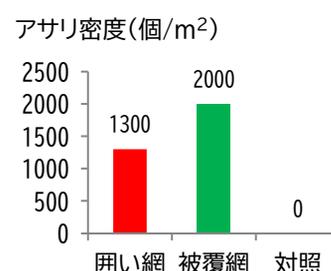
活動の成果と課題

アサリ資源の回復を目的に、被覆網の本格運用、また省力化を目指した囲い網による新たな食害防止対策を検討してきた。

囲い網の試験を実施した結果、被覆網区の方でアサリの生息密度は高いものの、囲い網区でも十分に効果を発揮できることを確認した。また、本格運用に向けて囲い網区の規模を大きくし、区画内で被覆網を併用しながら検討を進めたところ、被覆網がない場所でも試験規模とほぼ同様の成果を得ることができた。

現在、食害防止だけでなく、稚貝の集積効果も見込める被覆網を、囲い網の中で併用・運用した方が良いのか。また、被覆網を併用する場合の期間について検討を進めている。当地区の干潟には、現在、マガモやオナガガモ、ヒドリガモが冬季に数多く飛来し、アサリなどを捕食している。鳥類による食害防止対策も含め、今後検討を深めていきたい。

■ 囲い網試験の結果



■ 本格運用に向けた囲い網試験結果

